

The Futaka Spirit

(現教だより第5号)

そ組 縦割り創造活動

活動名「そらとべ『そ組』のプロジェクトをスタートさせよう」

支援者 山本 明伸 先生

細やかな表現物、子どもの感受を引き出す演出など、入念な準備が光っていました。「気付き」の段階でありながら、一人一人のエピソードの丁寧な見取りに頭が下がりました。個々のこだわりをどのように受け止め、どう支援していくのか、今後が楽しみです。

【学習活動】

- 1 これまでに共有した内容の要件を確認する。
- 2 資料を提示し、ホスピタルアートについての感受を促す。



写真，説明，手紙，VTR…しかけの連続



教師の意図性の発揮

- 3 各学年に分かれて取り組みたい活動内容について話し合う。



同学年での活発なやりとり



共通体験で得た気づきを可視化する

- 4 全体交流を行い，課題を精選する。



最後に見えた貴重なこだわりの姿



課題の精選へ…

(文責 橘 慎二郎)

【山本先生コメント】

「自分にとって意味のある価値を創造するための見方・考え方を育む」プロジェクトにするために、どのように課題設定を行っていけばよいか。教師が期待する範囲で子どもが思いや願いを抱くことができると、理想的であるかもしれないが、そのバランスの取り方や方策の難しさを感じた。これからのご実践を拝見する中で、自分なりに明らかにして行けたらと思う。

山本実践【そ組 縦割り創造活動】

～ そらとべ「そ組」のプロジェクトをスタートさせよう！ ～



本実践の主張点

価値を創造する見方・考え方を育むことができるプロジェクトにするために、

提案1 子どもの気付きを促し、異学年集団が主体的にプロジェクトの課題を吟味できる状況をつくる。

提案2 育みたい見方・考え方を意識して取ったエピソード記録を形成的評価に生かす。

子どもの主体性と教師の意図性の調整を図る

山本提案では、年間を通じたプロジェクトが子どもの見方・考え方を育むものとなるためには、子どもの思いを主に置きつつ、そこに教師の意図を反映させていくことが大切であると述べられている。では、子どもの主体性と教師の意図性の調整を図るには具体的にどのような手順が必要であるのだろうか。提案者の主張の骨子をまとめると以下の通りである。

○ 子どものノートから個々の思いを見て取り、「気付き」への支援に生かす。

まずはそれまでの創造活動の体験や興味・関心などから、子どもが自由に取り組みたいプロジェクトを考えることができる機会を設定する。子どもはあれこれとアイデアを出すものの、昨年度までの踏襲のイメージが強く、なかなかその目的までには目が向けられないことが多い。しかし、そこで教師が意図性を強く出し、子どもの自由な発想を奪ってしまうことがあっては子どもはどんどん受け身になり、自分事のプロジェクトという意識はもてなくなることが懸念される。そこで第一段階では教師は我慢して子どもの願いを受け止めることが大切である。その際、子どもの見取り方としてノートを活用する。教師の意図を直接言葉で伝えるのではなく、ノートへのコメントという形で教師の助言を間接的に伝えることで、子どもは自己の思いを再認識し、自分の中に「気付き」が育まれてきていることを自覚できるようになると考える。

○ 子どもの共通体験に教師の意図を反映させる。

共通体験のねらいは、子どもが意味を感じて取り組める課題を見出すための、何らかの気付きを促すことである。ここで、共通体験は、子どもの主体性と教師の意図性の調整を図ることができる1つのチャンスであると捉えている。ここでいう教師の意図とは、共通体験と育みたい見方・考え方との関連を図るということである。体験の入り口は子どもの興味・関心であっても構わない。そこでの「ひと・もの・こと」との出会い方を教師が工夫することで、体験は、子どもにとって意味のあるものとなり、そこから、新たな気付きや願い、問いが生じやすくなるのではないだろうか。

○ 子どもが共通体験での気付きを視覚的に想起できるよう、写真での記録を継続していく

物事を具体で捉える1年生と、関係付けて捉えることのできる6年生では、気付きの質はそれぞれ異なる。従って、個々の気付きを言葉だけで話し合った場合、思いを巧みに語れる子どもや影響力の強い子どもの思いに左右されるということも考えられる。そこで共通体験での気付きは常にデジカメで画像として記録し、教室内に掲示することで、それらを常に振り返ることができるようにする。画像として残しておくことで、発達段階に関わらず、その当時の記憶を鮮明に振り返ることができ、共通の土台で話し合うことにもつながっていく。

育みたい見方・考え方を意識しながらエピソードを積み上げる

子どものエピソード記録は、子どもの実態を客観的に見て取ることで、価値の創造につながる子どものよさを伸ばすために生かされてきた。本提案ではエピソードを集める際、見方・考え方につながる場面に焦点化して見ていくようにしている。そうすることで、創造活動のねらいである、自分にとって意味のある価値を生み出すための見方・考え方を適切に見て取り、指導に生かせると考えた。

山本実践では、プロジェクト内容決定前のこの時期でありながら、多くの子どもたちの実態を細かく把握し、それぞれの成長の様子が見て取っていることに価値がある。内容について葛藤や吟味が行われる、プロジェクト決定前のこの時期だからこそ育みやすい見方・考え方があるのではないか。

成果と課題

○ 「学び続ける」「関わる」「創造する」という発達の道筋に着目してエピソードを積み上げたおかげで、育みたい資質・能力につながる個々の状況が把握でき、形成的評価につながった。

△ エピソードには教師の思いや捉えを反映させず、子どもの言動のありのままを残していくようにしたい。その上で教師は子どもの変容について着目し、見方・考え方が育まれているかどうかを判断していく。「しかけ、そして待つ」という創造活動での教師の関わり方を再度見直したい。